

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

163-04 東京都新宿区西新宿2丁目1番1号

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701~3

Fax: 03-3342-6911

October 1992

No.62

- 2 研究助成の選考を終えて
- 3 研究助成対象一覧
- 6 市民活動助成の選考を終えて、助成対象一覧
- 7 国際助成の選考を終えて
- 8 国際助成対象一覧
- 12 「隣プロ」翻訳出版促進助成の運営および選考について、他
- 14 最近の報告書から、新刊紹介、他
- 16 研究経過報告会のご案内、公募のお知らせ

第65回理事会を開催

助成対象に187件を決定

去る9月28日、当財団の第65回理事会が都内にて開催され、1992（平成4）年度の各助成対象に関する審議と決定が行われた。その結果、研究助成、市民活動助成（第1期）、国際助成、「隣プロ」翻訳出版促進助成など合計187件、総額にして4億78万円の助成が決定された。おもな内容は以下のとおり。

■研究助成は56件、1億9,940万円

助成対象の内訳は、個人奨励（第I種）研究が27件、試行・準備（第II種）研究が19件、総合（第III種）研究が10件となっており、申請総数681件から見た採択率は8.2%と、これまで同様厳しいものとなった。対象となった研究課題は多岐にわたり、問題に対するアプローチも多彩であった。内容的には、従来どおり、研究を通して広く社会のニーズに応えようとするものが多かったが、中でも本年度は、ヨーロッパ研究および旧ソ連との共同研究等、時代の変化に敏感に対応する研究が数多く採択された。（P. 2～5 参照）

■市民活動助成は10件、1,770万円

本年度第1期の市民活動助成については、過去最多の125件の申請があったが、このうち助成の対象は10件、採択率は8.0%と、これまでで最も厳しいものとなった。採択された多くは前回同様、何等かの点で、市民が「自立」していく上での“支え”や“参考”となる内容を有したものである。（P. 6～7 参照）

なお、本助成の第2期分の公募は、この12月15日まで行っている。詳しくは「市民活動助成係」まで。（P. 16参照）

■国際助成は82件、1億1,365万円

東南アジア諸国などにおける各地の「固有文化の保存と振興」に関する（現地の人々による）研究や事業に重点をおいたこの助成では、今回82件がその対象となった。

なお、このうち5件は、本年度より新たに開始された「マレーシア東南アジア研究奨励助成」の助成対象。（P. 7～11参照）

■「隣プロ」翻訳出版促進助成は33件、5,253万円

“隣人をよく知ろう”プログラムは、日本と他のアジア諸国および、アジア諸国相互間の理解促進を狙いとしているが、ここでは、書籍の翻訳・出版を促進するための助成を行っている。

本年度より運営方式を一部変更し実施した結果、「日本向け」17件、「アジア相互間」16件がそれぞれ助成の対象となった。

（P. 12～13参照）

■その他

「東南アジア諸語辞書編纂出版助成」（1件）および「計画助成」（5件）の助成対象として合計6件、1,750万円が決定された他、「成果発表助成」対象2件の報告・承認が行われた。

第18回助成金贈呈式を開催

去る10月15日午後1時30分より、第18回の助成金贈呈式を東京・新宿区内のホテルにて開催した。今回、助成の対象となられた方々や財団関係者など多くの出席者を迎え、豊田英二会長の挨拶、各選考委員長による選考経過・報告の後、各助成の代表者5名に助成金贈呈書が手渡された。

1992年度研究助成の選考を終えて

理事長

研究助成選考委員長 飯島 宗一

◎選考経過と結果について

9月28日の理事会において本年度研究助成対象56件、総額1億9940万円が決定した。その内訳は、個人の若手研究者の奨励を目指す第Ⅰ種研究が27件、4410万円、グループによる試行・準備のための第Ⅱ種研究が19件、6800万円、総合的展開を目指す第Ⅲ種研究が10件、8730万円となっている。

以下に、この決定に至るまでの経過の概略をご報告する。

本年度の公募も従来どおり4月1日から5月31日までの間、基本テーマを「新しい人間社会の探究」とし、「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」の2つの重点課題を掲げて行われた。この基本テーマは1984年以来、また2つの重点課題は88年以来継続しているもので、研究への助成を通して現代社会の抱える様々な問題の理解や解決に寄与するという財団の設立主旨に即して設定されたものである。

本年度はこれに対して総数681件の応募が寄せられた。昨年度の762件に比べれば若干の減少ではあるがそれでも56件の採択から見れば約12倍の厳しい競争である。種別にみると第Ⅰ種研究327件（採択27件に対し約12倍）、第Ⅱ種研究309件（採択19件に対し約16倍）、第Ⅲ種研究45件（採択10件に対し4.5倍）と、結果からは第Ⅱ種での競争が一番厳しかったことになる。

選考においては、第Ⅰ種研究について6人の専門委員、第Ⅱ、Ⅲ種研究については9人の選考委員が個々の申請の評価と委員会での審議にあたった。委員会も6月末の準備会、7月末の第Ⅰ種研究の専門委員会および第Ⅱ、Ⅲ種研究の第1回選考委員会、8月末の第2回選考委員会と数次にわたって開催され、その間に各委員は、大部の申請書のみならず、特に継続案件については経過報告書や7月末に行われた経過報告会での報告内容までも含めた綿密な評価を行ってきた。

◎採択課題について

採択された課題は自然、社会、人文のすべての分野にわたり、問題に対するアプローチも実に多彩である。

第Ⅰ種研究では、外国人の採択が12件と昨年の5件を大きく上回っている。その内訳は中国3、韓国3、カナダ2、朝鮮1、コロンビア1、フィンランド1、ブラジル/日本（二重国籍）1であった。第Ⅰ種研究の継続助成は例年極めて狭き門だが、今年はNo. 2、No. 22とNo. 27の3件がいずれも一定の成果をまとめる上での必要性が認められ採択となった。

第Ⅱ種、第Ⅲ種の共同研究では、近年のヨーロッパ情勢の変化に対応したNo. 46とNo. 47、No. 54がそれぞれ継続として採択された。また、今年申請の中では特に旧ソ連の解体という大きな状況の変化を反映して、旧ソ連との共同研究やあるいは現地の研究体制の支援を意図したものが目立った。その中からNo. 30、No. 33、No. 39、No. 40、No. 43など5件が採択されている。先のヨーロッパ研究ともあわせるとこうした時代の変化に敏感に対応する研究が数多く選ばれたことが本年度のひとつの特徴といえる。この他にも採択となった課題は、いずれも途上国が当面する問題への国際協力や、相互理解のための基盤づくりなど、研究を通して広く社会の要請に応えることを目的とするもので、それぞれが所期の目標を達成して実り多い成果がもたらされることを期待する。

財団が「新しい人間社会の探究」を研究助成の基本テーマとしてからすでに8年になる。この間の社会の変化はますます加速されているとの感がある。助成金に対するニーズも、より国際的、学際的、職際的な色彩が濃いものとなってきている。このような背景を踏まえて、財団では今年から来年にかけて研究助成プログラムの根本的な見直しに取り組むことにした。外部の専門家に依頼して、これまでの実績についての評価とこれにもとづく提言を行っていただき、ニーズにより即応した助成のあり方を模索していきたいと考えている。

助成財団は、助成に期待を寄せる多くの人々に支えられてこそ社会的な役割を果たすことができるものである。これからの研究助成のあり方についても、忌憚のないご意見やご提言をお寄せいただければ幸いである。

1992年度 研究助成対象一覧

第I種(個人奨励)研究 [27件:4,410万円]

注 研究題目末尾の継2(3)は、継続2年目(3)年目を示す。
助成金額下の()は、助成期間を示す。無記入は1年間。

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
1	伐採をめぐるブラジルアマゾン地域の熱帯林消失に関する実態動向調査—地元NGOとの協力、連携による調査研究—	原後 雄太	ブラジルロンドニア州“NGOフォーラム”	200
2	経済発展による地域社会の変容過程に関する日本と中国の比較実証研究—農村地域を中心として—	章 政	東京農業大学大学院農業経済学科	180
3	中国の経済発展と人口流動現象の発生、拡大に関する実証的研究—人口流動と社会経済の変容を中心に—	大島 一二	東京農業大学農学部	150
4	国家管理、イデオロギー、そしてマイノリティーの相互関係—朝鮮総連系在日朝鮮人の社会人類学的研究—	梁 順	英国ケンブリッジ大学社会人類学部大学院	130
5	20世紀アジアにおけるアジア映画交流史の研究—東南アジアを中心として—	松岡 環	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	200
6	生殖医療技術と文化・社会の相関関係—不妊治療技術と胎児診断技術を通してみる日本人の生命観・家族観・自然観—	柘植 あづみ	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科	170
7	コロンビアの稲作農民における労働の近代化による健康影響—日本との対比に基づいて—	カロリーナ ヴィスル	東京大学大学院医学系研究科	190
8	アジア地域における日本企業と現地従業員との労使紛争及び紛争解決上の問題点	李 鋌	東京大学大学院法学政治学研究科	150
9	カースト「族譜」文献に基づくインド社会像の再構築—所蔵調査と事例研究—	藤井 毅	東京外国語大学外国語学部	160
10	江戸時代の日本刀剣の研究—鐔、小道具について—	アイヤ ミュール ライネン	京都大学美術史学	150
11	韓国における未公開・未確認謄本の調査研究—能楽の変遷に関する研究の一環として—	徐 禎 完	法政大学文学部	120
12	マダガスカルにおける伝統的自然観と環境保護思想の変容に関する研究—「欧米主導」の自然保護から「当事者国主導」への試み—	斉藤 千映美	東京大学大学院理学部	120
13	日本の看板文化の特質を探る—幕末・明治期における看板の洋風意匠受容過程を中心とした基礎的研究—	立部 紀夫	神奈川県立神奈川工業高等学校	160
14	中世宗教美術資料を通して信仰者の文化サロンの結衆の形成とその背景を明らかにする研究	青木 淳	国立総合研究大学院大学文化科学研究科	170
15	北東アジア地域(日本海および黄海沿岸の諸国)における援助・貿易・投資の政治経済学的分析	謝 大 維	シカゴ大学政治学部大学院	200
16	創られた日本人イメージ—欧米におけるステロタイプ日本人像形成の過程、普及・定着化に関する比較文化研究—	ホックリー アレン	トロント大学大学院東洋学科	160
17	日本における入院医療の患者による評価に関する研究—医療の質の評価指標の標準化および指標補正法の開発—	今中 雄一	東京大学大学院医学系・ミシガン大学大学院	180
18	音楽、神、そして人間と自然—中国と日本を中心とする東アジアの祭祀儀礼音楽研究—	朱 家 駿	大阪大学大学院文学研究科	150
19	異なる社会制度における国民国家の先住民族政策の比較研究—インディアン、アイヌ、ウイグルの伝統文化と先住民政策の衝突を中心として—	トフティ テュニヤズ	立教大学文学部	200
20	熱帯雨林地域の経済と環境の変容—東カリマンタン・マハカム河中流域でのフィールドワークを基に地域の視点から—	佐々木 英之	ムラワルマン大学熱帯降雨林研究所	160

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
21	フランス都市におけるアフリカ系移民の宗教行動に関する文化人類学的研究—日系新宗教運動への参加にみるエスニシティの持続と変化を中心として—	櫻尾 直樹	早稲田大学人間科学部	160
22	日本の桶・樽文化の特性に関する研究—中国大陸・朝鮮半島の桶・樽文化の比較を通して—	石村 真一	郡山女子大学附属高等学校	120
23	ベトナム北部における村落の文化人類学的研究—公田制と戦争と社会主義をキーワードとして—	高岡 弘幸	ハノイ総合大学ベトナム研究協力センター	130
24	DNA分析の法的統制—プライバシー保護の観点からのEC、ドイツ、日本の法政策の比較—	藤原 静雄	国学院大学法学部	130
25	アジアにおける西洋人の建築活動とその変遷に関する基礎的研究—ポルトガル、スペインにおけるアジア建築活動に関する文献総覧作成を中心として—	西山 宗雄 マルセーロ	東京大学大学院工学系	190
26	日・韓関係の報道から見たコミュニケーション・ギャップの研究—1965年日韓国交正常化以後の言論報道を中心として—	李 鍊	延世大学校文科大学	180
27	ケニアの自然保護区の外側に生息し、家畜と共存する大型肉食獣ヒョウの生態及びその家畜に対する被害を軽減する方法の研究	水谷 文美	ケンブリッジ大学生理学部大学院	200

第Ⅱ種（試行・準備）研究 [19件：6,800万円]

28	中日流通の比較研究	馮 昭 奎 他 4名	中国社会科学院日本研究所	340
29	角筆文字の科学的解析とその言語文化史的研究—日中兩國における角筆文献の発掘調査をめざして—	吉澤 康和 他 5名	産業技術短期大学	250
30	チェルノブイリ核被災の後障害に関する総合研究—医学的調査と社会変革に伴う心理的対応について広島との相補的比較—	佐藤 幸男 他 7名	広島大学原爆放射能医学研究所	400
31	多文化理解のためのカリキュラム・教授法をめぐる国際比較研究—日・中・ロ・英の比較調査—	関 啓子 他 15名	一橋大学社会学部	340
32	地球環境という視点からみたブータンの国家開発と環境保全	栗田 靖之 他 5名	国立民族学博物館第二研究部	380
33	環オホーツク海地域における海獣狩猟民文化成立過程の研究—北海道・サハリン・マガダン・カムチャッカでの考古学調査—	山浦 清 他 11名	立教大学文学部	400
34	京都の都市デザイン政策に関する研究—環境シミュレーションによる都市の環境制御方法の選択—	大谷 幸夫 他 8名	(株)大谷研究室	350
35	新しい産業モデルの出現—自動車産業を中心とした国際的比較共同研究—	清水 耕一 他 9名	岡山大学経済学部	340
36	「大陸の花嫁」策の社会的基盤と戦後日中社会に与えた影響—日中戦争期における青年女子移民政策の経緯と具体的展開に関する研究—	久保 義三 他 6名	武蔵野美術大学	340
37	日本および諸外国における桶・樽の歴史的総合研究	小泉 和子 他 9名	小泉和子生活史研究所	190
38	サハラにおける高度技術移転に伴うオアシス社会の変容過程の研究	小堀 巖 他 6名	明治大学政経学部	400
39	ロシア共和国内の博物館に収蔵されるアイヌ民族資料の調査研究	岡田 路明 他 2名	日ソ極東・北海道博物館交流協会	330
40	激動する旧ソ連邦における科学研究機関の活動状況と今後の動向に関する調査研究	市川 芳彦 他 2名	文部省核融合科学研究所	400

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
41	幕末・維新期の風聞集等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究—民衆の情報収集・分析・活用に関する研究—	宮地 正人 他 7名	東京大学史料編纂所	350
42	東南アジア熱帯林における伝統的生業と近代的開発—森と人の織りなすモザイク構造の分析—	甲山 隆司 他 6名	京都大学生態学研究センター	400
43	中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響	石田 紀郎 他11名	京都大学農学部	400
44	手話コンピュータ辞書の構築に関する研究—映像メディアによる手話辞書—	鎌田 一雄 他 7名	宇都宮大学工学部	390
45	満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究—特に民俗学の領域において—	愛新覚羅頤琦 他 7名	満学協会	400
46	東西ドイツの再統合とそのEC統合および東欧変革に対するインパクト—元的社会経済体制の転換と中・東欧の民族問題—	住谷 一彦 他12名	東京国際大学	400

第Ⅲ種(総合)研究 [10件: 8, 730万円]

47	ヨーロッパ周縁地域における民族問題と移民・難民—「国家」概念の再検討—	畑中 幸子 他 4名	中部大学国際関係学部	1000 (2年)
48	満州族の言語と文化に関する共同研究—満日漢辞典の編纂を目標として—	河内 良弘 他 5名	天理大学文学部	450 (2年)
49	北極アイスコアを利用した地球規模汚染の歴史と将来予測—自然(火山爆発・隕石落下等)と人間活動の割合—	工藤 章 他 5名	カナダ生化学・技術研究所	1300 (2年)
50	ネパールにおける科学・数学カリキュラムの改善をめざす日常生活の中での知識・認識の研究	上野 直樹 他 8名	国立教育研究所	900 (2年)
51	太平洋島嶼地域の「持続可能な人間社会の発展」策に関する総合的研究	佐藤 幸男 他11名	名古屋大学大学院国際開発研究科	900 (2年)
52	ロンタラ調査に基づく南スラウェシの伝統医薬の研究	山本 出 他10名	東京農業大学農学部	700 (2年)
53	タイ国北部の焼畑から常畑への移行過程における耕地生態と村落社会の変容に関する研究—モンスーン環境に調和した耕地持続型農業システムの開発と定着を目指して—	服部 共生 他11名	京都府立大学農学部	900 (2年)
54	1989-90年革命の展開に伴う東欧の地方社会の変容に関する研究	南塚 信吾 他14名	千葉大学文学部	1200 (2年)
55	中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ	江畑 敬介 他15名	都立松沢病院精神科	480
56	発展途上国における突然死の実態及び予防に関する研究—タイ東北部住民にみられる Lai Taiを素材として—	遠藤 仁 他14名	東京大学医学部	900 (2年)

研究助成合計

56件

19,940

1992年度 市民活動助成（第1期）の選考を終えて

市民活動助成選考委員長 栗原 彬

◎今回の申請概況

本年度・第1期の市民活動助成については、この4月1日から6月20日にかけて公募し、応募のあった125件の申請について選考が行われた。その結果、選考委員会での慎重な審査を経て、次頁の通り合計10件、1,770万円が助成対象となった。

今回の申請全体に関する特徴として先ず挙げられることは、申請件数がはじめて100件を超える過去最多数となったことである。これを地域別に見ると、東京・神奈川を主とする関東地域が67件（前回16件）、および、大阪を主とする関西地域が27件（前回16件）と、大都市圏に拠点を置く団体からの申請が特に増えており、それ以外の地域からの申請は微増であった。また、申請様態については、再申請や一団体からの複数申請も散見された。テーマの面では、まち（地域）づくり、環境保護・保全、障害者の自立、東南アジアを主とする開発途上国の問題等に関わるもの、および、市民社会の基盤づくりに役立つとするものなど、近年の社会変化に敏感に反応し、“草の根”の視点で自立的に活動していこうとする意欲が伺えた。市民活動が、ポリシイをもつネットワーク形成型の活動に成長しつつあること、また、これに伴い、その経済的基盤や組織のあり方を、未だ模索の段階とは言え、自覚的に求める徴候が見えるようになったことが指摘できよう。しかし、大都市圏以外の地域からの申請は少数であり、市民社会としての地域社会の熟成未だしの感がある。都市圏においても、こうした件数の飛躍的な増加やテーマの多彩さに比べ、計画内容については力量不足の感じを抱かざるを得ないものも少な

くなかった。

◎選考について

さて、今回の選考については、従来どおり、力量があり他への拡がりを感じさせる活動を評価することは当然としても、こうした助成制度に比較的馴染みの薄い、都市圏以外の地域からの申請、および活動歴は浅くても将来性のある活動にも注目していこうとする態度が委員全員におしなべて見られた。その結果、各委員から推薦のあったものの散らばりも多く、選考委員会では計画内容を中心に、熱心な議論が展開された。採択された多くは、何等かの点で、市民が「自立」していく上での“支え”や“参考”となる内容を有したものであり、いずれも今後の市民による活動の広がりと深さを追求していく際に欠かせない興味深いもので、これからの展開と成果の波及を期待したい。

なお、今回採択に至らなかった申請については、内容的に助成の趣旨から外れる、表現や記載方法の面で具体性を欠く、焦点が不明確などといった基本的な問題の他に、現時点で計画を実施することの意義や重要性が特に大きいとは考えられない、他の財源で行うことがむしろ望ましい、発想は良くても内容的に未成熟などという計画立案上の問題で、結果として高い評価が得られず残念な結果となった。

それでも、後者の申請のうちのいくつかについては部分的に評価する声もあり、計画を十分練り直した上で、再度申請されることを期待する旨の意見が出されたことも付け加えておきたい。

1992年度 市民活動助成対象一覧

No	テ マ	代 表 者 名	代 表 者 所 属	助成金額 (万円)
1	東京・日野市における「市民版・まちづくりマスタープラン」作成の試み	明峯 哲夫 他10名	日野・まちづくりマスタープランを創る会	190
2	「資料 日本ウーマン・リブ史 全三巻」の出版	三木 草子 他7名	「資料日本ウーマン・リブ史」刊行をすすめる会	170
3	フィリピンー日本共同 都市農村地域住宅建設・供給における運動体経験交流フォーラムの開催と準備	ホルヘ アンソレーナ 他13名	ポンの会 (ACHR日本事務局)	170
4	精神障害者のセルフ・ヘルプ活動に関する史的検証および研究成果の報告書作成	石川 到覚 他14名	セルフ・ヘルプ活動を考える会・略称活動史研	180
5	すずめ共同作業所の活動に関する記録の出版	伊野部 淳吉 他6名	(社福)すずめ福祉会	120

No	テ ー マ	代 表 者 名	代 表 者 所 属	助成金額 (万円)
6	登校拒否・不登校の児童・生徒に対する教育援助の一環としてのホームスクーリング活動	奥地 圭子 他10名	東京シューレ	200
7	「自立生活センター設立ハンドブック」(仮称)作成のためのモデルプロジェクト	山田 昭義 他11名	全国自立生活センター協議会 (J I L)	190
8	富士山流域における水のネットワークづくり	渡辺 豊博 他11名	三島ゆうすい会	160
9	患者塾の開催とブックレットの発行	辻本 好子 他13名	医療人権センターCOML	200
10	アメリカ市民活動に関する日本向け情報誌「草の根アメリカ」(仮題)の発行	岡部 一明 他12名	日本太平洋資料ネットワーク (J P R N)	190
市民活動助成合計		10 件		1,000

1992年度 国際助成の選考を終えて

国際助成選考委員長 石澤良昭

◎選考結果の概要

国際助成に関する打診は一年間を通して受け付けているが、選考は7月と9月の2回の選考委員会で行われた。今回の本助成への打診は518件あったが、そのうち国際助成の対象地域(東南アジア)と対象テーマ(固有文化の保存と振興)からみて、選考委員会の審査の対象となった申請は125件、一方審査の対象とならないものが393件あった。

そして選考の結果、82件・897,300ドルが採択となった。その国別内訳は、ブルネイ1件、カンボジア2件、インドネシア11件、ラオス8件、マレーシア9件、ネパール1件、フィリピン17件、タイ10件、ヴェトナム23件となっている。

◎選考方法について

国際助成は、選考委員会の審査の対象となる申請についてはすべて財団のスタッフが申請者にインタビューし、補足情報を収集することになっている。

選考委員会では、申請書とスタッフからの報告をもとに、7人の選考委員で選考を行った。これらの委員は東南アジア各国の研究者であると同時に、この助成が対象としているテーマによってカバーされる専門分野(ディシプリン)の専門家である。審査は2つの視点、すなわち、当該国の研究状況の中での申請プロジェクトの意義、さらに専門分野の方法論の適切性から行われる。限られた時間内に多くの申請を効率よく、しかも丁寧に審議することが要求されるが、この点は微妙なバランス感覚が必要である。

◎今年度の傾向について

今年度も昨年度に引き続き、ヴェトナムへの助成が最多数23件となった。選考委員会の審査の対象となった申請件数も46件と最も多かった。助成対象の所属機関も多様化し、従来のヴェトナム国立社会学センター、ハノイ大学、ホーチミン大学だけでなく、ヴェトナム中部のフエ大学、フエ歴史遺産管理局、ホイアン史跡管理事務所等の研究者も初めて助成対象となった。ヴェトナムの研究者の熱意が反映されているが、急増するとどこまで対応しきれるかが今後の課題となる。

また今年度からカンボジアのプロジェクト2件が新しく助成対象となった。これはカンボジアの状況の展開を見て、そろそろ助成を行うことが可能であろうとの判断から財団のスタッフがカンボジアを訪れ、調査を行ったことの結果である。

◎マレーシア東南アジア研究奨励助成について

東南アジアにおける若手の研究者による東南アジア研究の促進を図ることを目的として、今年度より「マレーシア東南アジア研究奨励助成」を開始した。マレーシアでは、東南アジア研究で修士号や博士号がとれることを鑑みて、マレーシアの大学に籍を置く東南アジアの若手の研究者を対象に公募を行い、10件の申請があり、5件の助成を決定した。助成対象者はマレーシア人だけでなくインドネシアとフィリピンからの留学生も含まれている。

1992年度 国際助成対象一覧

ブルネイ [1件: 10,200 ドル]

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (ドル)
1	パタニ: イスラム君主主権国家から少数民族コミュニティへ	ワン・カディル C. M.	ブルネイ・ダルサラム大学 歴史学科 講師	10,200

カンボジア [2件: 34,300ドル]

2	音楽とクメール人の生活	K. ナロム	芸術大学 教員	5,000
3	パーリ語クメール語辞書の再版と配布	O. ケム	仏教研究所 所長	29,300

インドネシア [11件、144,700 ドル]

4	スダ文化百科事典	アイップ R.	作家	20,000
5	ジャワの村落盗賊: 1850年-1942年 [継-3]	スハルトノ	ガジャマダ大学文学部 歴史学科 講師	1,800
6	フローレスの地方語(リオ語, シッカ語, ングダ語)の機能 [継-2]	アロン M. ムベテ	ウダヤナ大学文学部 講師	4,000
7	暴力、抵抗と反乱: 1942年から1962年のアチェ社会史 研究 [継-2]	M. イサ S.	ジャクアラ大学教育学部 上級講師	3,400
8	西ジャワのバンテン遺跡発掘成果報告書および伊万里焼図録の 編集・印刷 [継-2]	ハサン M. A.	国立考古学研究所 所長	40,000
9	バリの貝葉文献ロタルのマイクロフィルム化 [継-2]	I. G. N. R. ミルシャ	州立バリ文化記録センター	6,900
10	南スラウェシの村落社会の社会・文化変容 [継-3]	イドゥルス A.	ウジュンパンダン教育大学 社会科学教育学部 講師	8,700
11	ビマ文化の保存: ビマ年代記、テキストおよび口承伝統の翻字 と翻訳	ヘリウス S.	バンドゥン教育大学 社会教育学部歴史学科 講師	7,800
12	インドネシアの老人のライフスタイルと生きがいに関する研究	クンチャラニングラット	インドネシア大学社会人類学 名誉教授	18,000
13	バリのクレジット組織の発展: 1859-1973年	I. B. シデマン	ウダヤナ大学文学部歴史学科 講師	3,900
14	国際会議: 東南アジアにおける東南アジア研究の推進	ヒルマン A.	インドネシア科学院 社会文化研究センター 所長	32,000

ラオス [8件、80,500 ドル]

15	古代ラオスの碑文研究 [継-2]	トンサ S.	情報文化省博物館考古学局 局長	9,800
16	ラオス美術史の研究 [継-2]	ボウヘン B.	情報文化省博物館考古学局 局長補佐	5,500
17	カンボジア語-ラオ語辞書の編纂 [継-4]	マハ・カンパン V.	ラオス社会科学委員会 副委員長	18,000
18	ラオ慣習法貝葉文献の翻字 [継-2]	サムリット B.	情報文化省ヴァナシン雑誌 顧問	7,700
19	貝葉文献のインヴェントリー作成 [継-5]	ダラ K.	情報文化省ヴァナシン雑誌 所長	27,500
20	ラム・シタンドン歌謡の研究	トンカム O.	情報文化省文学局 局長	7,500
21	民話、格言、歌謡にみられるフモン族の伝統の研究	ネン X.	情報文化省ヴァナシン雑誌 副編集長	1,500
22	ラオスの教育史研究のセミナー	カミー B.	ヴィエンチャン教育大学 心理・教育学部 学科長	3,000

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.62

マレーシア [4件、20,100ドル]

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (ドル)
23	陸軍元帥ピブソンクラームの生涯と時代ー最も長く務めたタイの首相	コブクワ S. P.	マレーシア国立大学歴史学科 準教授	4,300
24	村落社会からプランテーション労働者へーマレー半島東海岸のマレー人の地域レベルにおける文化変容と社会変化	ワン・ザワウィ I.	マラヤ大学経済経営学部 準教授	3,700
25	マレーシアの8家族：民族とマレーシアの開発がもたらした社会・経済的結果	アジザー bt K.	マラヤ大学文化人類学科 準教授	8,100
26	クランタン、パタニ地方語の比較研究	ニック・サフィア K.	マラヤ大学マレー研究学科 教授	4,000

ネパール [1件、12,800ドル]

27	古典ネパール語辞書編纂 [継-8]	K. P. マッラ	ネパール語辞書委員会 委員長	12,800
----	-------------------	-----------	-------------------	--------

フィリピン [17件、194,000ドル]

28	ネグロス・オクシデンタル州の社会・文化・経済史：1850年-1985年 [継-6]	V. L. ゴンザガ	セント・ラ・サル大学 社会調査センター 所長	3,100
29	スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査、翻字、翻訳、出版 [継-4]	V. B. リキュアナン	フィリピン歴史文化保存 ナショナル・トラスト副会長	24,300
30	生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ：イフガオ族のライス・テラスの事例 [継-2]	S. D. マヒウォ	フィリピン大学アジア研究所 助教授	15,000
31	ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習 [継-3]	H. K. グロリア	アテネオ・デ・ダバオ大学 社会科学部歴史学科 教授	19,500
32	フィリピンの水にまつわる伝承：モスレムを中心として [継-2]	A. T. マンプアイ	ミンダナオ州立大学 講師	3,000
33	ラ・ウニオン：州の成立、1850年-1990年 [継-2]	A. O. メインバン	ニュー・エラ・カレッジ 学長	11,800
34	フィリピン諸語辞書 [継-7]	E. コンスタンティーノ	フィリピン大学社会科学・哲 学部言語学科 教授	3,900
35	モロランドの20世紀の民族史 [継-2]	F. V. マグダレーナ	ミンダナオ州立大学研究セン ター 所長	8,400
36	フィリピン研究のための固有の資料 [継-3]	J. M. フランシスコ	アテネオ・デ・マニラ大学 ロヨラ神学校 助教授	20,300
37	フィリピン南部・スリガオの考古学、先史、民族史 [継-2]	L. E. バウゾン	フィリピン社会科学協議会 理事会委員長	24,300
38	エリオ・コレクション：ミサミス・オリエンタルの地方史のための資料 [継-2]	F. B. デメトリオ	セイヴィヤー大学博物館 館長	4,400
39	民主主義、安定、そして発展：1946年から1992年のフィリピン議会の役割	R. S. ヴェラスコ	フィリピン大学マニラ校 文理学部社会学科 助教授	10,300
40	17世紀と18世紀のフィリピンの社会史	L. C. デリー	フィリピン研究協議会 メンバー	7,800
41	フィリピンの1935年から1951年の間の外交政策の展開：日本を中心として	R. T. ホセ	フィリピン大学社会科学・哲 学部歴史学科 助教授	2,100
42	輸出経済における外資会社の役割：1920年から1949年のビルマの米とフィリピンの砂糖に関して	M. S. I. ジョクノ	フィリピン大学社会科学・哲 学部歴史学科 準教授	9,100
43	ジガンテス島の民族誌：人間活動のシステムとエコロジカル・セル	C. N. ザヤス	フィリピン大学ヴィサヤ校 水産学部水産政策研究所 助教授	18,400
44	マギンダナオ族の慣習と信仰	E. R. ディソマ	ミンダナオ州立大学社会・ 人文学部 準教授	8,300

タイ [10件、137,700ドル]

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (ドル)
45	現代クメール語との関連における古代・中世クメール語辞書 [継-3]	ウライシー V.	シンラパコン大学考古学部 助教授	12,400
46	チェンマイーランブン盆地の古代集落 [継-2]	サラスワディー O.	チェンマイ大学人文学部 歴史学科 助教授	13,500
47	タイ法制史：シャム王国と南部王国の法的システムの比較研究 [継-3]	ピティナイ C.	タマサート大学法学部 助教授	18,200
48	東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷 [継-2]	タダ S.	コーンケーン大学建築学部 講師	17,600
49	アホム・ブランジ文献の研究 [継-2]	レイヌー W.	アユタヤ歴史研究センター 講師	14,700
50	パンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究 [継-5]	ピチット A.	チェンマイ大学人文学部 タイ語学科 準教授	13,100
51	タイにおけるホアビン人の研究 [継-3]	スリン P.	シンラパコン大学考古学部 準教授	6,700
52	チャオ・プラヤ・デルタとメコン・デルタの比較研究：土地の 状況と歴史的発展	ナロン T.	チュラロンコン大学理学部 地理学科 準教授	15,700
53	ビルマにおけるタイ(シャン)文字の歴史と発展	サイ・カム・モン	アユタヤ歴史研究センター 上級研究フェロー	14,800
54	タイ・ルー族の織物の比較研究	ソンサク P.	チェンマイ大学芸術文化 センター 助教授	11,000

ヴェトナム [23件、230,100ドル]

55	ハ・ナム・ニン沿岸地域における開墾と新しい村の設立の歴史 [継-2]	P. D. ドアン	ハノイ大学歴史学部 教授	6,000
56	ヴェトナムの伝奇物語の研究 [継-2]	N. H. チ	ヴェトナム国立社会科学セン ター文学研究所 教授	8,500
57	ヴェトナムのドンソン文化 [継-2]	H. V. タン	ヴェトナム国立社会科学セン ター考古学研究所 所長	7,500
58	漢字で書かれたヴェトナム小説の総合コレクション [継-2]	T. ギア	ヴェトナム国立社会科学セン ター ハノム研究所 教授	14,900
59	1975年以降のホーチミン市における開発に対する華人の社 会的ポテンシャル [継-2]	M. ドゥオン	ヴェトナム国立社会科学セン ター 所長代理	6,800
60	オケオ文化 [継-2]	L. X. ディエム	ヴェトナム国立社会科学セン ター ホーチミン市社会科学 研究所 副所長	18,600
61	ヴェトナム語慣用句辞典 [継-2]	H. V. ハン	ヴェトナム国立社会科学セン ター言語学研究所 所長	7,800
62	北ヴェトナムにおける高齢者と社会保障体系 [継-2]	B. T. クオン	ヴェトナム国立社会科学セン ター社会科学研究所社会構造 ・社会政策部 部長	11,800
63	ヴェトナム百科事典 [継-5]	P. N. クウォン	国立ヴェトナム百科辞典 編集センター 教授	20,000
64	国際会議：現代生活における伝統的祭り [継-2]	L. H. タン	ヴェトナム国立社会科学セン ター 副院長	13,300
65	10世紀から19世紀中ばまでのヴェトナム族の移住の歴史 [継-2]	D. トゥ	ヴェトナム国立社会科学セン ター人口・開発研究センター 所長代行	9,000
66	現代チャム語-ヴェトナム語、ヴェトナム語-チャム語辞書 [継-2]	B. K. テ	ホーチミン市大学ヴェトナム ・東南アジア研究センター 所長	6,100

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.62

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (ドル)
67	ヴェトナムの伝統演劇、ハッポイの辞典	N. ロック	ホーチミン市文学・言語学 学科長	11,200
68	ヴェトナムのジャーナリズムの歴史：1865年-1990年 90年	H. M. ドゥック	ハノイ大学ジャーナリズム学 部 学部長	5,200
69	フエの伝統工芸	N. H. トン	フエ大学考古学・民族学 学科長	2,500
70	フエ美術館所蔵美術品の研究とカタログの出版	T. C. グエン	フエ歴史遺産管理局 所長	8,500
71	クアンナム・ダナン省ホイアンのサーフィン甕棺文化の考古学 発掘	N. D. ミン	ホイアン史跡管理事務所 副所長	14,900
72	ミン・マン帝陵	M. K. ウン	トゥア・ティエン・フエ省 文化情報スポーツ局 研究員	5,700
73	ヴェトナムのフモン族	P. Q. ホアン	ヴェトナム国立社会科学セン ター民族学研究所 研究員	8,700
74	カオダイ教	D. N. ヴァン	ヴェトナム国立社会科学セン ター宗教研究センター 所長	5,000
75	大学レベルの東南アジア研究の教授カリキュラムの改善	P. D. ズオン	ヴェトナム国立社会科学セン ター東南アジア研究所 所長	9,000
76	ヴェトナムの地簿コレクションの詳細な検討	N. D. ダウ	ホーチミン市社会科学委員会 メンバー	22,300
77	ヴェトナムの編年学、永久暦、および累積暦	L. T. ラン	ヴェトナム国立科学センター システム経営研究所 教授	6,800

マレーシア東南アジア研究奨励助成 [5件、32,900ドル]

78	"ドミサイル" から"ドメイン" へ：独立後のフィリピン、マ レーシアの現代文学の代表作品の形成	L. J. マラリ	マレーシア国民大学ムラユ言 語文学文化研究所 博士課程	9,000
79	東スマトラとマレー半島のハドゥラーの比較研究	ライラン M.	マラヤ大学東南アジア研究学 修士課程	2,500
80	マヨン：マレー世界の歌謡と芸術	J. S. フェルナンド	マラヤ大学東南アジア研究学 修士課程	7,100
81	植民地の財政システム、1900-1942年：英領ビルマと英領マ ラの比較研究	ジョージ S.	マラヤ大学東南アジア研究学 修士課程	7,900
82	19世紀のタイ：近代化の始まり	マラ・ラジョ S.	マラヤ大学歴史学科 修士過程	6,400

国際助成小計

82 件

897,300

83
| インドネシア若手研究者奨励研究助成(対象一覧は省略)
143

61 件

119,100

国際助成合計

143 件

1,016,400

1992年度 「隣人をよく知ろう」プログラム

翻訳出版促進助成の運営および選考について

◎プログラムの一部変更

本年度よりプログラムが2つの点で変更になった。第1に、従来、東南アジアと南アジアに分けていたプログラムを統一した。これに伴い、2つあった委員会（東南アジア委員会と南アジア委員会）を廃し、代わってプログラムの全体をカバーする「隣人をよく知ろう」プログラム委員会が新たに発足した。

第2に、従来、「東南・南アジア向け」と「東南・南アジア相互間」に分かれていたサブ・プログラムを統合して、「アジア相互間」と名づけることとなった。ここで言う「アジア」の中には日本も含まれる。統合されたプログラムでは、日本・東南アジア・南アジアの何れかの国々の間の翻訳を通じた相互理解を図ること、がプログラムの趣旨となる。

◎日本向け — 5カ年計画の2年目

平成3年度より開始した助成5カ年計画の2年目となる本年度は、ほぼ計画通りプログラムの運営を行った。

平成4年2月に、助成計画の対象となる63冊（全体76冊のうち、13冊は平成3年度に既に助成決定している）の出版時期の再確認を参加出版社に対して行い、平成3年1月に行った前回の調査結果を一部修正した。前回調査に基づき平成4年度の申請金額の合計を3,000万円と想定したが、今回の再確認調査の結果、実際はこれを下回ることが予想

されたため、該当出版社および翻訳者と協議の上、1件を平成5年度予定から一年繰り上げるよう調整した。（平成5年度は出版予定が特に多いので）。

7月15日までに、平成4年度出版予定（平成4年11月～平成5年10月）の17件につき申請書を提出してもらった。申請金額合計3,052万円。「隣人をよく知ろう」プログラム委員会にてこの17件を審議したが、特に問題はないためこの17件を助成対象候補に決定した。

◎アジア相互間

本年度は、16件37冊の申請があり、「隣人をよく知ろう」プログラム委員会にて審査を行い、16件26冊（助成金額合計、173,700ドル）の助成対象候補を決定した。うち、ネパールの1件がプロジェクト方式（一組織が年間5～6冊をまとめてプロジェクトとして翻訳出版する方式。プロジェクト管理費などの間接経費も助成対象となる）であったが、他は全て個別方式である。

◎東南・南アジア諸語辞書編纂出版助成

現代ヴェトナム語大辞書（代表 川本邦衛）の継続4年目の助成を行うこととなった。本辞書は1993年3月出版予定。

（国際助成部門 牧田・記）

1992年度 『隣人をよく知ろう』プログラム助成対象一覧

「翻訳出版促進助成」日本向け [17件; 3,052万円]

No	日本語仮題名(国名)	訳者名	出版社名	助成金額(万円)
1	泥棒(ヴェトナム)	川口 健一	段々社	181
2	フェイスの歌(パキスタン)	片岡 弘次	花神社	112
3	パンジャブ生活文化誌(パキスタン)	麻田 豊	平凡社	128
4	サバルタン・スタディズ(インド)	竹中 千春	平凡社	209
5	ティルックラルー古代タミルの箴言集(インド)	高橋 孝信	平凡社	168
6	ギータ・ゴーヴィンタ、デーヴィ・マーハートミヤ(インド)	小倉 泰、横地 優子	平凡社	140
7	ヤージュニャヴァルキヤ法典(インド)	渡瀬 信之、井狩 彌介	平凡社	235
8	インドの偉大な音楽思想家たち(インド)	井上 貴子、田中多佳子	穂高書店	239
9	ランサーン王国の興亡(ラオス)	星野 龍夫、平田 豊	穂高書店	231
10	リー・クアンユー首相中国を語る(シンガポール)	田中 恭子	穂高書店	224

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.62

No	日本語仮題名(国名)	訳者名	出版社名	助成金額 (万円)
11	ベンガル民芸論(バングラデシュ)	小西 正捷	穂高書店	168
12	はるか遠き日(ヴェトナム)	加藤 則夫	めこん	107
13	焼身(インド)	山下 博司	めこん	153
14	オケオ文化とメコンデルタの古代文化(ヴェトナム)	菊池 誠一	穂高書店	280
15	チャンパーの小枝(ラオス)	星野 龍夫、前田 初江	めこん	112
16	七〇年代(フィリピン)	栞谷 哲	めこん	156
17	変わりゆく村(スリランカ)	青山 鏡一	南雲堂	209

「翻訳出版促進助成」アジア相互間 [16件; 173,700ドル]

No	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (ドル)
1	<i>The Makioka Sisters</i> (『細雪』)のベンガル語への翻訳と出版 [継-3]	F. ラッビ	アフメッド記念財団 専務理事	8,000
2	<i>A History of Japan Vol.1</i> のヴェトナム語への翻訳と出版 [継-6]	N. D. ジェウ	ヴェトナム国立社会科学センター 社会科学出版局 局長	12,800
3	<i>The Family</i> (『家』)のヴェトナム語への翻訳と出版	P. レ	ヴェトナム国立社会科学センター 文学研究所 所長	9,500
4	<i>Japan: Past and Present</i> のヴェトナム語への翻訳と出版	H. ヴァン	ヴェトナム国立社会科学センター ホーチミン市社会科学研究所 副所長	11,500
5	<i>Economic Growth and Income Distribution and Governments and Market in Economic Development</i> のヴェトナム語への翻訳と出版 [継-5]	D. P. ヒエップ	ヴェトナム国立社会科学センター アジア太平洋研究所 所長	14,500
6	<i>Science, Technology and Society in Postwar Japan</i> と『日本社会の構造』のヴェトナム語への翻訳と出版	C. M. タイン	ヴェトナム国立情報出版社 所長	16,100
7	<i>Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan</i> のインドネシア語への翻訳と出版 [継-5]	M. サストラプラテジャ	カルティ・サラナ財団 副理事長	6,200
8	<i>The Rise of Ersatz Capitalism in Southeast Asia</i> のマレーシア語への翻訳と出版	イシャク S.	フォーラム メンバー	8,300
9	<i>Islam and Its Relevance to Our Age</i> のマレーシア語への翻訳と出版 [継-2]	サバリア A.	イクラック 編集者	2,300
10	<i>The Dinosaur of the Dessert</i> (『砂漠の恐龍』)のインド6言語への翻訳と出版 [継-2]	R. P. ダミジャ	ナンダルタ 設立会員	29,200
11	<i>Black Rain</i> (『黒い雨』)、 <i>The Phoenix Tree and Other Stories</i> および <i>Silence</i> (『沈黙』)のウルドゥー語への翻訳と出版 [継-2]	S. アンシャリ	マシャル財団 事務局長	17,200
12	<i>El Filibusterismo</i> のインドネシア語への翻訳と出版 [継-2]	アフマド R.	ドゥニア・プスタカ・ジャヤ 社長	7,900
13	『春琴抄』のシンハラ語への翻訳と著者谷崎潤一郎の生涯と作品の解説の出版 [継-6]	D. A. ラジャカルナ	日本文学翻訳委員会 委員長	5,500
14	南アジア文学作品6点のネパール語、ネワール語への翻訳と出版 [継-3]	K. M. シャクヤ	文学財団 理事長	3,000
15	<i>Thai PEN Anthology</i> のマレーシア語への翻訳と出版 [継-3]	アブバカル H.	学術振興財団 理事長	8,200
16	<i>The Unknown Craftsman</i> と <i>Botchan</i> のベンガル語への翻訳と出版 [継-2]	B. チョウドリ	文学翻訳クラブ 会長	13,500

東南アジア諸語辞書編纂出版助成 [1件; 550万円]

No	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
1	現代ヴェトナム語大辞典 [継-4]	川本 邦衛	慶応義塾大学 言語文化研究所 所長	550

第2回日本ネットワークス・フォーラム

～市民活動のレベル・アップをめざし、川崎・大阪・名古屋にて開催～

播磨靖夫 日本ネットワークス会議・代表

近年、さまざまな“思い”を背景とした「草の根活動」が、各地で、多様な形で活発に展開されつつあるが、このことは、人間本来の生き方を問い直し、人間らしくありたいという真摯な願いに駆られた行動と捉えることができよう。

一人ひとり弱い個人が、自由に緩やかに手をつなぐことにより、こうした思いや願いを実現していくための方法としての“ネットワーク”をめぐり、私たち「日本ネットワークス会議」では、1989年秋に、第1回のフォーラムを東京と大阪にて開催した。その結果、市民自らの活動が連携することにより、人間を真に解放し、人と人、人と自然との共生を基本に、生活および地域のレベルから全地球的な課題にまで対処するための「新たな社会システム」の構築が、今後の社会にとってきわめて大切、且つ、緊急な課題であることが確認された。

一方、昨今では、国際的には民主化を追求する動きが急速に進展し、また、地球環境に対する世界共通の危機意識と協働の取り組みが行われつつある。さらに、国内に目を転じると、「企業の社会貢献」等、フィランソピーやメセナ活動と呼ばれる新たな試みに伴い、民間による公共的な活動への関心も高まってきている。

他方、市民活動やボランティア活動など、草の根活動の分野においても、特定のイデオロギーや思想等に主導された運動よりも、ごく身近な地域や生活の現場から、人間および社会全体に共通する問題や課題に取り組んでいこうとするネットワークの“輪”が次第に拡がりを

見せている。

こうした社会状況の変化と意識の深まりを踏まえつつ、今回、『ネットワークを形に！～個人と社会の新しいあり方を考える～』を基本テーマとした第2回のフォーラムを、来たる10月31日より、以下の通り開催することとなった。

- ▶ 「フォーラム in 川崎」
10月31日(土)および11月1日(日)
於・KSPホール
- ▶ 「テクニカル・セミナー」
11月3日(火)および11月4日
於・川崎市民プラザ
- ▶ 「フォーラム in 大阪」
11月7日(土) 於・大阪YMCA会館
- ▶ 「フォーラム in 名古屋」
11月8日(日) 於・NHK名古屋

ここでは特に、行政や企業主導による従来の取り組みでは対処しきれない大事な事柄を先駆的に担う活動団体(NPO: Non-profit Organizations)、および、その背景としてのNon-profit Sectorのあり方や今後の課題について、影響力のある試みを既に数多く実践しているアメリカの関係者等も交えながら、密度の濃い報告や討論を行う予定となっている。

▽ ▽ ▾

プログラムおよび申込み方法などの詳細については、「日本ネットワークス会議・事務局」(〒105 東京都港区海岸1-4-26 (財)ナイスハート基金気付 ☎03-5472-5276 担当・横/桐澤)までご連絡を。

最近の報告書から

下記の報告書が印刷になりました。

入手希望の方は、送料分の切手を同封の上、「財団レポート係」まで封書にてお申込み下さい。

『中国の乾燥地における沙漠化防止に関する実証的研究—毛烏素沙漠におけるモデル牧農場の建設に向けて—』(内蒙古沙漠開発研究会・編・刊、B5判 214頁、'92.8、送料310円)

かつてそのほとんどが草原であったにもかかわらず、急激に砂漠化が進行した毛烏素砂地は、中国内陸部でも太陽エネルギー、水、土壤等、豊かな天然資源に恵まれている。しかもこれらの資源が開発されやすい条件を有している。こうした状況の下、内蒙古沙漠開発研究会では1985年以来、当財団の研究助成によって日中共同による砂漠緑化と農業開発を目指してきた。

研究会では現在、89年の研究成果『中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析—毛烏素沙漠緑化と農業開発に関する基礎的研究—』で得られた知見に基づき、実際に毛烏素砂地にモデル牧農場を計画・設計・建設することを目標としている。さらには、モデル牧農場をもとにした牧農家の生産基盤と経営基盤を確立すると同時に、当該地の牧農業社会の将来像と砂漠化との関連性を考慮した長期的な予測を行い、砂漠化に逆行しないような社会形成についての開発技術の体系化を試みることにしている。

第I章では、90～91年にかけて毛烏素砂地研究センターの一角に建設されたモデル牧農場の生産基盤・経営基盤の特性と保全管理等について、砂防・緑化・気象・灌漑・経済学等の立場からの総合的な提言が、第II章では、従来の日中共同研究で得られた成果からの研究発表論文

(英文)がそれぞれ掲載されている。また終章では、参考資料として過去10年の農業開発、砂漠緑化の変遷を伝える写真集(白黒)、および、88~91年にかけての毛烏素沙地における継続的な気象データ、農家を対象としたアンケート調査の結果が紹介されている。

人口問題が世界規模で再燃しつつある今日、こうした長期にわたる砂漠緑化の研究と農業開発による生活基盤の創出は非常に重大であり、貴重な資料となるだろう。(K. T.)

『誕生日を福祉の日に一心のネットワークング25年ー』(誕生日ありがとう運動本部・刊、A5判、199頁、'92.7、送料 240円)

「誕生日ありがとう運動」は、1965年5月、神戸市内のある小学校・障害児学級で発足した“ちえおくれ問題”に関する社会運動である。当時、関係者等は、「偏見と差別」を具体的に打ち破るためには、「ちえおくれの問題をみんなのものに」することが大事だと考え、誰にでも例外なく年に一度巡ってくる「誕生日」をこの「ちえおくれの問題」と結びつけることで運動を展開していった。

本書は、25年にわたる運動の軌跡を当財団の市民活動助成によってとりまとめたものである。「一粒の種子 地におちて」と題し、運動のコンセプトと経過を多角的にまとめた第1部、および、関係者等の声や今後の展望などで構成した第2部「ちえおくれの問題をみんなのものに」とから成る。(G. W.)

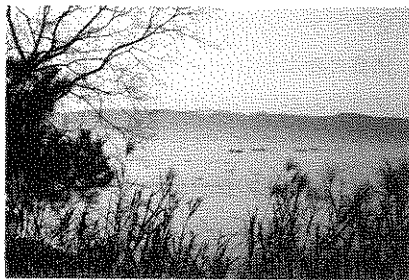
新刊紹介

『宍道湖物語～水と人とのふれあいの歴史～』
保母武彦・監修、川上誠一・著
藤原書店・刊 ('92.7)
A5判 246頁、2,200円(税込)

シジミは古くから日本人に親しまれている貝のひとつだが、国内では主に3種類ある。ヤマトシジミ、マシジミ、セタシジミだ。このうち、食用として最も好まれ、一般市場にでているのはヤマトシジミである。これらの主産地が宍道湖で、そのうまさの秘密が「汽水」、すなわち、海水と真水が混じりあった水にあることをどれ程の人がご存知だろうか？ シジミだけではない。汽水という特性ゆえに、宍道湖は自然の宝庫であり、隣り合せの中海もまた同様である。

この自然豊かな湖で、1963年、「宍道湖中海干拓淡水化事業」という水源開発の国家プロジェクトが始った。これら沿岸の人々は、水環境の破壊を懸念し、湖の自然を、そして人間と水との交渉ある暮らしを守るために立ち上がり、その後の長きにわたる運動の結果、遂にこれを「凍結」せしめた。しかし、この間、25年の歳月が経過し、759億円という巨費が投じられたのである。

▼宍道湖近影



本書は、環境保全を目的とした住民の声によって、国家プロジェクトが完成目前にして凍結されたわが国史上初めての出来事を記録したものであるのみならず、その背景としての宍道湖の水と人とのふれあいの足跡についても様々な資料を駆使してとりまとめた。宍道湖問題とは何であったのか。また、宍道湖沿岸の人々は事業凍結の向こうに何を求めたのか。近年、各地で顕発する開発と環境保全をめぐる対立にとっても示唆するところ

ろ大きい書として一読を薦めたい。なお、本書の作成と出版に際しては、当財団より市民活動助成が行われた。(G. W.)

『流水の来る街』
中村圭三・著
古今書院・刊 ('92.8)
B6判 158頁、1,700円(税込)

1986年から89年にかけて、当財団・第4回研究コンクールの研究助成を受けた紋別市在住の有志からなる「オホーツク流水研究会」は、「オホーツク海の流水と人間生活とのかかわりに関する研究」を行ってきた。その成果は、既に財団の助成研究報告書(C-017)として89年12月に公表されている。本書の著書は現在、千葉敬愛短大の教授であるが、当時、紋別市の道都大学に在職し、同研究会のメンバーとして研究に取り組んできた。

本書は、著書の12年にわたる道都大学在職期間中の生活経験と、流水が沿岸地域の自然におよぼす影響の研究結果、さらには流水研究会のメンバーとしての住民生活調査などの結果をもとにまとめられたもの。「流水」を自然科学の対象としてのみとらえるのではなく、地元



に生活する人々の目から見た「流水」を描いているところに特徴がある。流水は、過去においては「白い魔物」として「暗いイメージ」でとらえられることが多かったが、「流水まつり」などのイベントが定着するに伴い、「明るいイメージ」が増してきているという。

本書ではここからさらに一歩進めて、流水と共存し流水を生かしたこれからのまちづくりのビジョンをも提案している。(M. K.)

研究経過報告会のご案内

当財団では、この11月26日（木）と27日（金）の両日、昨年（1991）年度研究助成のうち、第Ⅲ種研究を主体とした研究経過報告会を下記のとおり実施予定です。

（場所は、いずれも新宿三井ビル会議室）

ご関心おありの方は、「研究助成係」までご連絡ください。

〔11月26日〕 10：00～16：30

- ・分子進化中立説の変容についての文化論的考察—日本・米国・西欧・ソ連の比較—（斎藤成也、他）
- ・インドネシア伝統工芸に関する日本・インドネシアの共同研究—ジャワ更紗を中心とする歴史・意匠・技術の総合調査（小笠原小枝、他）
- ・インドネシア・タイにおける精神遅滞者への地域生活援助に関する実践的研究（岩崎正子、他）
- ・熱帯林業の機械化に伴う生活変容と健康影響に関する研究（二塚 信、他）
- ・子どもの権利の国際的展開とわが国社会の対応—子どもの権利条約とその具体化に関する職際的・総合的研究（石川 稔、他）
- ・日本における性別役割分担の史的的研究—男性主導社会内での女性文化のあり方—（脇田晴子、他）
- ・人間とコンピュータとを統合化した先端的生産システム技術の構築に関する国際的共同研究（長町三男、他）

〔11月27日〕 9：50～17：00

- ・国際化時代の学校カリキュラムの比較研究—日本と香港とシンガポールのバカロレア教育の比較調査研究—（浅沼 茂、他）
- ・先端基礎科学分野における国際融合—大型望遠鏡ハワイ設置計画をめぐる文化制度上の諸課題—（小平桂一、他）
- ・長期ケア老人のケースマネジメント試行とその経済的社会的評価に関する研究（前田信雄、他）
- ・第二次世界大戦中の日印関係およびその影響—南アジアの国家形成と日本—（長崎暢子、他）
- ・海外所在中国絵画の総合的調査（戸田禎佑、他）
- ・中国・西安市における歴史的な中心地域の保存と再生に関する日中共同研究（大西国太郎、他）
- ・ヤシ科植物の多様な生産物に見る日本とアジア・太平洋—その生産・流通・消費の現場から—（鶴見良行、他）
- ・ブラジルからの日系出稼ぎ労働者に関する総合的研究—送出国ブラジルと受入国日本双方の視点から—（渡辺雅子、他）
- ・来日アジア・アフリカ系外国人の生活適応と日本人との共生に関する研究（山崎喜比古、他）

* * *

報告時間は1チームにつき40分。うち、30分は報告に、10分を質疑応答とする予定。

公募のお知らせ

当財団では、現在、下記のとおり本年度第2期の市民活動助成に関する公募を行っております。

- ・助成内容 活動の交流や促進に役立つプロジェクトに対する助成で、〈出版〉とそれ以外の〈プロジェクト〉の2種類があります。
- ・公募期間 1992年12月15日（必着）
- ・助成金 1件につき100～200万円程度
- ・助成期間 1993年4月1日より1年間
- ・申請用紙 〈出版〉または〈プロジェクト〉の別を明記し、送料分（1部・250円、2～3部・360円）の切手を同封の上、12月5日までに「市民活動助成係」宛て封書にてお申込みください。

編集後記

▶今回もまた、多数の助成対象が決定しました。これで、1975年度からの助成累積は、件数にして3000件、金額にして82億円を超えました。

▶確かに大きな額ですが、助成金とは、単なる交換手段としての金銭とは異なり、「出す側」、「受ける側」相互間における“思い”の伴った“共感”の一つの形であると考えます。

▶これらの成果が、特に目立った形ではなくとも、今後の問題や課題を先取りしながら、徐々に社会に浸透していくことを永い目で応援していきたいものです。

トヨタ財団レポート No.62

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛お申込みください。

発行日 1992年10月19日
 発行所 財団法人 トヨタ財団
 発行人 山口日出夫
 編集者 渡辺 元
 印刷 真友工芸株式会社